
原 著

養育体験を通した母親の生き方 — M-GTAを用いた成長の構造についての考察 —

坂 元 友 美

(追手門学院大学)

Way of life of the mother through the nurturing experience :
Discussion about the structure of growth using the Modified Grounded Theory Approach

Yumi Sakamoto

(Otemon Gakuin University)

問 題

山口（2010）によれば、親に関する研究は、
BowlbyやAinsworthから始まった愛着に関する研究や、
養育態度に関する研究などが、特に母親に焦点を当
て様々な研究者によって行われてきた。しかし、こ
れらの研究における親の位置づけは主眼が子の発達
に置かれており、親はその発達を規定する環境要因
として扱われてきた。その後、無力であると考えら
れていた乳児に同調行動などの自発性・積極性があ
ることが発見され、親から子への一方的な影響のみ
を問題とするのではなく母子関係の相互作用の重要
性が指摘され、これに関する研究も増えてきた。し
かし、これらの研究の主眼はやはり子の発達に置か
れていた。これは、発達研究が子が大人に至るまで
の変容の過程を明らかにするものであったため、大
人である親は「その発達に最も影響を与える存在で
ある」という意味において研究に取り上げられてき
たためと言えるだろう（山口 2010）。

親に焦点を当てた研究は1980年代ごろから増えて
いる。この理由として大日向（1991）は3つの理
由を挙げている。第1に非行・暴力をはじめ、子の
体力低下や生活習慣の未確立、知性と情操の発達の
アンバランスなど、この発達の歪みの多発の主たる
要因として親や家庭の教育力の低下を問題とする社
会的認識の高まりである。第2に、若い世代に育児

への準備性が欠如していることを問題とする社会的
認識の高まりである。親世代が核家族であったり、
きょうだい数が少ない、受験競争の熾烈化が、子ど
もへの接触経験や子どもへの共感性の欠如につな
がっているものとして問題視された。第3に、女性
の高学歴化や社会参加の増加に伴い、女性のライフ
スタイルや自我意識が変化していることが挙げられ
た。この変化に伴い、男女の関係性や育児における
性役割分担が再検討されるという社会的な風潮が高
まってきたことが挙げられる。これら社会的な背景
が親研究への関心を高めた要因であるとされている。

このように、家庭を取り巻く環境は短い期間に大
きな変化を見せており。例えば1985年には男女雇
用社会均等法が成立し、性別を問わざず社会進出を目
指すことができる環境が整い始めた。かつて日本では夫婦のうち主に男性が働き手となる片働きが主流
であった。この片働きは2013年の国土交通白書によ
れば、年によって増減があるものの全体として減少
の傾向にある。一方で共働き世帯数は増加していき、
1997年には片働き世帯数を上回っており、後も増加
し続けており、片働き世帯数との差は拡大傾向にある。

これに伴い女性のライフスタイルも変化し、志向
する生き方も変化してきたといえる。女性は母親
というだけでなく社会人としての側面を持つようにな
ってきた。しかし一方で少子化等の社会的背景も
あり、子育てや教育は母親の役割として重要視され
たままである。また平均寿命の伸びもあり、親世代

との協力など、母親は様々な側面で環境と対面すると考えられる。

成人の成長に伴う心理的変化についての研究として代表的なものにErikson（1980）によるアイデンティティの獲得がある。成人期は青年期後の成人初期、中年期、老年期の3段階に分けられる。ここでは本研究に関わる中年期、老年期について取り上げる。

中年期の心理・社会的危機は世代性と自己陶酔である。世代性の原語はGenerativityで、エリクソンの造語である。ここでは鑑（1990）の訳を採用した。世代性の豊かさを獲得されていない場合、退行して偽りの親密さを強迫的に求めたり、親としての責任を果たすことを難しくすることが多い。子どもを持つ親であっても、児童相談を行う場所に訪れる若い両親のほとんどがこの段階の発達が遅れていったり、発達していかなかったりすることに苦しんでいるようである（Erikson 1980）。

次に老年期である。この段階での心理・社会的危機は統合性と絶望の対立である。死を受容しこまでの人生を自分のものとして受け入れていくこと、その肯定的な部分も否定的な部分も統合して受け入れていくことがこの段階での課題となってくる（鑑1990）。

これまでの研究では、成人期のアイデンティティの発達には触れず、思春期・青年期の課題として獲得したものと自己の中核に生きていくと考えられてきた。

しかし、今日では成人期であってもアイデンティティは変容し発達し続けるものであると捉えられている（岡本1997）。また、長命化による長い成人期・老年期は青年期に獲得されたアイデンティティではとても支えきれないことが指摘されている。青年期に獲得されたアイデンティティはその後の人生のなかでさらに変容し、さらに発達、深化していくのではないかと岡本（1997）は述べている。つまり、アイデンティティの模索は成人期にも行われ、成人期の発達の節目ごとに再編成され成熟していくと考えられる。

成人期のアイデンティティの揺らぎについて注目されているものとして中年期の危機がある。これは、中年期がライフスタイルにおいて、生物的にも社会的、心理学的にも、また家庭発達の側面からみても変化の多い時期であることから、個人のアイデンティティが揺らぐ危機を指している。身体的な衰えに加え、職業的には自分の地位・能力の拡大の限界を感じ、さらに若いころの人生の夢の達成度につ

いて問い合わせられる時期でもある。また家庭においては子の自立が行われ、親としての役割というアイデンティティも揺さぶられる時期である。

本研究で取り上げる母親に焦点を当てるに、特に子との関係や、母親を取り巻く人間関係に注目できるだろう。中年期は子の親離れの時期といえる。今まで多くのエネルギーを注ぎ込んできた子どもが自立していく時期には、「空の巣症候群」といった、子の自立をなかなか肯定的に受け止められず、苦しむ親もいる。

また母親を取り巻く人間関係の1つとして、夫婦関係がある。夫婦関係においても、子を共同で育てていた時にはっきりしていたそれぞれの親役割によって結びつき、安定していたものが、子の自立によってそれがぼんやりとしてくると言える。「夫にとって自分はなんだったのだろうか」など、夫婦関係の再認識の欲求の高まりは多くの場合女性から発せられる（岡本1997）。

このように、成人期は心の発達の岐路として注目されている。子育てという大きなライフイベントを通して、それを終えたとき母親が何を経験し、そのアイデンティティはどう変化したかを明らかにすることによって変化の構造を知り、この発達における重要な要素を明らかにできると考えられる。

目的

本研究は養育体験が母親の変化に及ぼす影響の構造と、その後の母親の生き方への影響について明らかにし、加えて養育に伴う母親の混乱やありようの変化について考え、子育て支援につながる考察を行うことを目的とした。

方法

対象者とデータ収集

本研究の対象者は20代～30代の子どもを有する母親5名とした。対象者の属性を表1に示す。対象者の設定は、成人初期の子を有する親は子育て評価を含めて個人目標の達成を再検討する時期であるとする上田・平松（2001）の研究に基づいた。対象者は知人を通して依頼した。調査時期は2015年10月中旬から下旬である。面接場所は面接者がA大学の一室を提案し、承諾が得られる場合にはこれを採用した。また、この面接場所への訪問が難しい場合には面接協力者には面接者との合意により場所を決定し

表.1 対象者の属性

ID	年齢	職業の有無	子の性別と数	子の年齢
A	60代	無	M(1)	30代(1)
B	50代	有	M(1),F(1)	20代(2)
C	50代	有	M(2)	30代(2)
D	50代	有	M(1),F(1)	30代(2)
E	40代	有	M(1),F(4)	10代(2),20代(3)

た。調査方法は1人あたり30分～60分の半構造化面接であった。面接過程は対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。面接およびテープ起こしは面接者自身が行った。

面接手続き

面接協力者に対しフェイスシートへの回答を依頼し、記入後にICレコーダーを用いて面接を記録した。面接内容は養育経験を子どもが就学前、小学校時代、中高時代と分け、その時の具体的な関わりと感情について尋ねた。そして、子どもを持つ前と育て終わってからの自分にどのような変化があったのかという主観を尋ねた。面接の内容については、なるべく面接協力者の語る流れを損なわず、面接協力者から表現される内容に沿って質問していく形をとった。

倫理的配慮

調査に当たっては研究の趣旨、質問に対する拒否の自由、データの取り扱いについて、個人情報の扱いについてなどを事前に面接依頼書に記載し、事前に面接協力者に手渡した。その内容に同意が得られる場合、面接当日に改めてその内容を面接協力者と面接者で確認し、同意書へのサインを求めるという手続きをとった。

分析の手続き

分析方法として、木下（2003、2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach；以下M-GTA）を用いた。M-GTAは生成される理論が人間行動の予測と説明に有効であり、人間行動の変化と多様性の説明が可能なことから、ヒューマンサービス領域での実践的活用が期待されるアプローチである。本研究では母親の養育体験の語りから、母親の混乱やありようの理解から育児・養育への支援への考察を行うため、このアプローチが有用であると考えられる。また、研究対象としている現象がプロセス的な特性を持っている場合にも有効であるため、データから母親の変化への動きをとらえるのに適していると考えられた。

結 果

本研究は養育体験が母親の変化に及ぼす影響の構造と、その後の母親の生き方への影響について明らかにし、加えて養育に伴う母親の混乱やありようの変化について考え、子育て支援の充実につながる考察を行うことを目的とした。

分析の結果、33の概念が抽出された。さらに、各概念の関係を検討し、カテゴリーにまとめた結果、10のカテゴリーが成立した。ここでは母親の語りをM-GTAを用いて分析した結果としてカテゴリー、概念の説明、概念の説明に基づいたストーリーライン、結果図を提示する。

表2-1、表2-2、表2-3にカテゴリー、各概念の定義、具体例、類似例と対極例、具体例の発言回数、該当者数について提示する。カテゴリーの順番は図1に準じている。

概念の説明とストーリーライン

次に、それぞれのカテゴリーとカテゴリー間の関係について段階を追って記述する。なお、カテゴリーを〔 〕、概念を“ ”と表記する。

子育てへの責任感

子を有するに際して、母親としての責任や義務を果たそうとするものである。これは子を有することで認識されるが、子との様々な関わりや母親の変化によって再評価されたり、再認識される。母親は子の将来に対する責任感から子育てを全うしようとする（“子育てへの責任感”）。また、未熟な子に対して“保護責任の認識”を持つ。これは子を身体的・精神的に守り、また自分も子を攻撃してはならないことを親の責任とする考え方である。この語りは強く、子の未熟な部分が特に強調される。このように子の将来や成長が自分次第であるという責任感から“子への指導”が行われる。これは子を自分の望む方向に導こうとする母親の働きかけを指しており、その責任も同時に語られる。

子育てに伴う困難

“子への対応への肉体的な大変さ”や“子育て環境の不十分さ”など、〔子本位の関わり〕を難しくする要因群である。また、家族や地域の十分な支援が得られず1人で子育てしている感覚（“子育て中の孤独感”）と“周囲からの非難”による葛藤状態もこれに含めた。

また、〔子本位の関わり〕を積極的な行為とすることを困難にする要因として“子への理解への戸惑い”も含めた。

心理的ゆとり

子に対して心理的にゆとりをもって関われる状態を指す。“子を待つ”ことができ、子が困難な問題を抱えている場合にも“子への無条件の肯定と尊重”の姿勢をとることができると想定できる状態である。また、〔心理的ゆとり〕は〔子本位の関わり〕を強め、助ける。〔関係性の変化の認識〕にも関与していると考えられる。

子本位の関わり

〔子育てへの責任感〕を全うしようとすると同時に、子への働きかけを、子を優先して行う段階である。この状態には〔心理的ゆとり〕の存在が重要であると考えられ、“子に対する愛情”に基づき関わることができることで、“子との関わりを楽しむ”ことができ、子育てに充実感を得る助けになると考えられる。特に“子の視点を理解する”“子の抱える課題に対応する”では、自分の感情や大変さを後回しにして子に付き合う語りが多く見られた。この負担の大きな行動を行うことも“子への愛情”と〔子育てへの責任感〕が支えていると考えられる。また負担の大きい分、子への心理的同調が大きいと考えられ、“自分の事のように感情が動く”語りも多く見られた。

外部からの支援

〔子育てに伴う困難〕によって〔子本位の関わり〕に必要な〔心理的ゆとり〕が侵害されるとき、必要な母親の持つリソースからの支援のことである。この外部には家庭外の機関以外に、母親以外の家族構成員も含む。〔外部からの支援〕について面接協力者から子育てに有益なものとして語られた。“環境の充分さ”は〔子育てに伴う困難〕に含まれる“環境の不十分さ”への対極例となっている。“子育てに伴う肉体的な困難”を軽減させ、“周囲の助けと承認”があることによって心理的な負担感を減少させる効

果があると考えられる。

また、その効果として〔内省の機会〕を促すことができ、母親が〔心理的ゆとり〕を求めるきっかけになりえる。

自分本位の関わり

〔子育てに伴う困難〕のために子本位の関わりが阻害され、子よりも自分の感情や状況を優先して関わる段階である。子の行動がコントロールできないことに“子に対する怒り”を感じ、なんとか言うことをきかせようと感情的に振る舞ったり、自身の感情を理屈的に処理できず、混乱や葛藤が生じている語りの部分である。“子育てからの逃避願望”を含んだ段階であり、母親自身に〔心理的ゆとり〕の無い状態であると言える。

この状態に対して、「なんてひどいことをしたんだろう」「我に返った」(Eさん)など、〔内省の機会〕が起こる場合には、〔子本位の関わり〕が再び開始されることも期待できる。

内省の機会

〔子育てに伴う困難〕に影響された〔自分本位の関わり〕について、内省の機会となるような体験や気づきが起こる段階である。〔内省の機会〕があることによって母親は〔心理的ゆとり〕を求める必要を認識し、〔外部からの支援〕を求めることができ、それによってさらに深い気づきを得たり、〔心理的ゆとり〕を得ることができると考えられる。

関係の変化の認識

子の変化に応じて母親が子との関係を見直す段階である。“子の成長を受容する”ことで子の行動は子に任せることができると想定される“子への信頼感”が生まれる。また、そのことで“自分と対等な子の認識”が生まれる。またその様子を興味深く見られ、それに対する充実感を“子の成長を感じる”と概念化した。

母親自身の変化

子との関わりと自身の成長を通して自身の変化を感じる段階である。子を見守り通したことで“自身の成長を認識”し、過去の“困難の受容”が可能になる。また“困難の受容”は“体験の肯定感”に繋がり、過去に行った選択の結果を肯定的に感じることが可能となってくる。そして、子育て自体への肯定的な感情が生まれる（“子育てへの肯定的評価”）。

子育てへの心残り

子の成長を受け止められなかつたり、母親としてまだまだ未成熟である感じを抱く段階である。カテゴリーとしては「母親自身の変化」と対極例と考えられる。子の成長を受け止められない状態である“子の成長に抵抗する”は〔関係の変化の認識〕カテゴリーの“子の成長を受容する”の対極例と考えられる。また、“子に自分への信頼を求める”は子を未熟な存在とし、親を頼るように望む状態である。

これを〔子育てへの心残り〕にカテゴリー化したのは、子を未熟な存在とすることで、まだ親としての関わりを強く維持しようとしており、“子育てに対する不完全感”と結びついているのではないかと考えたためである。また、“子育てに対する不完全感”は子の成長に追いつこうとしている母親の心理状態であるとも考えられ、子からの関わりや〔外部からの支援〕によって“子の成長の受容”や“子育て体験への肯定感”への移行が期待される。

表2-1. カテゴリー・概念一覧

カテゴリー	概念名	定義	具体例・発言数	対極例
	1.子育てへの責任感	子の将来に対する強い責任感から子育てを全うしようとするとする	ちゃんと幼少期をきちんと育てないと家庭内暴力をするとか、非行に走るかっていうのが、ずっと空気を吸うように入ってたから、そうしないために幼少期をきちんとしないといけないという風に思ってた。(Aさん) A(3), B(1), C(2), D(1), E(4)	概念20
子育てへの責任感	2.保護責任の認識	子を身体的・精神的に守り、また自分も子を攻撃してはならないことを親の責任とする考え方である。	家族の事を考えたらしんどかったと思うな。でも守らないといけないという感覚は強かったと思う。(Eさん) C(1), D(4), E(5)	
	3.子への指導	子を自分の望む方向へ導こうとする	(偏差値の高い学校を狙えるのに)なんでワンランク下げるねんって(思った)。親は求めるでしょう。(Dさん) A(6), B(1), C(6), D(4), E(3)	
	4.子への対応の肉体的な大変さ	子に対して対応を行うことへの肉体的な大変さ	(朝は)バタバタした記憶が、肉体的にも精神的にも。せなあかんという焦る気持ちがあつて、その時はしんどかったんだろうなって思う。(Bさん) A(5), B(4), C(2), D(1), E(7)	
	5.子育て環境の不十分さ	子育てに十分な環境が無く子育てがより大変に感じている状態	近所に子どもがいなかつたし、どうやって遊ばせようかっていうのが悩んだ)。散歩に行つても近所に公園があるわけじゃないし、車のひって遠くの公園に行くとか。一番ちかいところでも4,5kmあったんじゃないかな。(Eさん) E(2)	概念17
子育てに伴う困難	6.子育て中の孤独感	家族や地域の支援が得られず、1人で子育てをしていく感覚を有する状態	(夫が)子どもに関わるとか全くなかつた。育児全部私がやって、お父さんは(家庭外の活動に)出つ放して、子どもれども、1人で子育てをしてが保育園に行つてもその手伝いのためにずっと家にいないといけなかつた。私もいっぱいいっぱいだつた。(Eさん) E(7)	
	7.周囲からの非難	子育てや仕事が周囲の人間に認められず歯がゆい状態	(体が小さい子どもを)よく(保育園に)あげるねって周りに言われたときはほつといつて思つた。私はちょっとでも早くしっかりするかなと思ってやりたかったんだけど。(Bさん) B(1), D(5), E(4)	概念18
	8.仕事との両立の葛藤	子のために仕事を辞めるべきか、続けるべきかに葛藤している状態	子どもに仕事辞めてくれって何度も言つた。友達は家に帰つたら親がいてるのに、なんで僕は学童保育いかないといけないので。仕事すること自体に辞めたいとか投げ出したいとかないことが、葛藤が大きかつた。(Aさん) A(1), E(2)	
	9.子への理解への戸惑い	子の行動原理が理解できず戸惑う	(子どもの特性)どちらも私にはないものなのよ。自分にならものが出てくる。理解できない、なんでそんな考え方するんだろうって。違う面が出てくるとどう対処したらいいかわからない。(Dさん) B(2), C(2), D(10), E(6)	
	10.子を持つ	子の成長を急かさずゆっくり待とうとする気持ち	人に迷惑かけているわけじゃないし、自分のできることを遅れてでもやってくれるようにしてくれればそれでいいと思う。(Eさん) A(2), C(1), E(8)	
心理的ゆとり	11.子への無条件の肯定と尊重	子がどんな特性・特徴を持つても認めていこうとする気持ち	自分に(そういう特性があれば)なんとか(理解)できるっていうのはあるけど、それが娘、それが息子って認めなきやいけない、こうしてほしいって私が思うことも娘にはないものなんだなって思う。(Dさん) B(1), D(4), E(2)	

表2-2. カテゴリー・概念一覧

カテゴリー	概念名	定義	具体例・発言数	対極例
	12.子との関わりを楽しむ	日々の子育てに追われるだけでなく、関わりの中に楽しみを感じる	今しかできんだろうな、今しか見れんだろうなっていうものを楽しむついでに記録を残そうと写真を撮りまくった。後で見てやめてっていう写真をたくさんとった。あれは親が楽しんでたよ。(Eさん)	A(2), B(6), E(10)
	13.子に対する愛情	子に対してかわいい、いい子などポジティブな感情を抱く	(自分の子は)面白いし優しい。兄弟にも優しいいい子だよって言いたかった。前からいい子だなって思ってた。悪い子じやないって思ってた。(Eさん)	A(1), C(2), D(1), E(4)
子本位の関わり	14.子の視点を理解する	子の立場に立って考え、この気持ちを理解しようとする	(小さな子がやっていることを)バカみたいって思はんと、なんでそれが楽しいんだろうって思ってやってみる。(子どもとのレベルに)合わせてみた方が楽しい。(Eさん)	A(3), B(1), D(2), E(5)
	15.子の抱える課題に応応する	子が抱える学校での問題や、母親の思惑を超えた行動に向き合う	息子が急に不登校になったことが大変だった。最初は引つ張って連れて行ったり、お父さんがいろいろしたかを超えた行動に向こうな。もう行きたくないとか、すごい拒否された。(Eさん)	A(1), B(1), E(5)
	16.自分の事のように感情が動く	子に起きたことを自分のことのように辛く思ったり心配する	(子の手術に際して)やっぱり親としては代わってあげたいとかあるし、(病院から)帰る時には後を追つたりするから、それはかわいそうだった。(Cさん)	C(4), D(3), E(1)
	17.環境の充分さ	子育てに十分な環境が整備され、負担が減少する	最初に預けた0歳児保育所がすごく手厚い保育をしてくれて、すごく気分的にも物理的にも楽で、その辺は救われましたけどね。(Aさん)	概念5 A(3), C(1)
外部からの支援	18.周囲の助けと承認	子育てや仕事において頑張りや大変さと親が見すこに、つていうイメージがあったんだけど、(保育園が認められ、それが)子どものいい関係を作るための手段です、って心理的負担を軽減している状態	(本当に大変だから預けたけど)田舎だと保育園に預けると親が見すこに、つていうイメージがあったんだけど、(保育園が認められ、それが)子どものいい関係を作るための手段です、って心理的負担を軽減し言わされたときに母親として荷が下りた。(Eさん)	A(3), D(2), E(11)
	19.子に対する怒り	子の行動がコントロールできず気が立っている状態	何か些細なことで(子どもが)言うこと聞かなくて、腹が立つて子どもを叩いたことがある。大声を出したこともしょっちゅうあった。(Eさん)	D(3), E(3)
自分本位の関わり方	20.子育てからの逃避願望	子育てのつらさから逃げ出したい気持ち	1人で車を夜中に出して逃げてやろうかって思ったこともあつた。死にたいとは思わなかつたけど、この現実から逃げたい、もっと楽になれたらって。家族の事を考えたらしんどかった。(Eさん)	概念1 E(4)
内省の機会	21.理想の母親像とのギャップによる立ち止まり	抱いていた理想的な母親と現実の自分のギャップへの気付き	私は(手を上げたり)絶対しないって思ってたのに自分もなんだって初めて気づいた。自分の理想的な母親のイメージに自然と近づくものだつて思っててもそうじやないんだつて思って我に返つた。(Eさん)	E(4)
	23.子への信頼感	子の行動を子の意思に任せられる	(子を尊重してきたのは)いわゆる非行のようなことはしないだろうという全幅の信頼があつたから。自分で自分を律することができるという意味での信頼があつた。(Aさん)	A(3), C(1), D(2), E(5)
関係の変化	24.子の成長を感じる	子の成長を興味深く思ったり、感じることによる充実感	思春期と言われる時期に入つてんなつて(思った)。そういうの見てるのは面白かつたよ。絵に描いたようやんかーつて。(Aさん)	A(1), D(2), E(5)
の認識	25.子の成長を受容する	子が親の手を離れて(卒業式や入学式にくるなと言われたとき)そういうもんなんいくことを受け入れらる	そういうもんなんいくことを受け入れらるだろうなつて(思った)。(Aさん)	概念31 A(6), D(2)
	26.自己と対等な子の認識	自分が関わりかけるだけなく、子を一人でいることを思つて思うところから始まる。私の知らないことも知つてゐる。人前と認め対等に扱う	(接し方)大人にといふか個人個人やね。もう子どもじやなう	A(3), D(2), E(2)

表2-3. カテゴリー・概念一覧

カテゴリー	概念名	定義	具体例・発言数	対極例
	27.自身の成長の認識	子を見守った自身の成長を認識する	結婚したばかりの頃はお父さんに頼りきってた。でも産んで育てていっている間に自分がしないといけないことが増えてくるから、そのストレスとかを感じながら少しずつクリアしていくことができて、だから強くなれたんかな。(Eさん)	A(3), E(5)
	28.体験の肯定感	自分が過去行ったことや選択の結果を再評価したとき、それ	(年を重ねる中で)泣くだけがストレスの発散ではなくなってくる。でもそういう時期があったからだと思う。手を挙げてしまふこともあるだろうし気を付けないといけないけどそういうストレスは妙に(自分を)成長させるところがある。(Eさん)	
母親自身の変化	29.子育てへの肯定的評価	子育てをしてよかつたと思える	子どもを育てたおかげでいろんな人と友達になれるし、そのため得るものもあるし、子どもは絶対持つべきだと思う。犠牲なんて絶対ないと思う。自分で育てていくお薬と思つていいかんといけないよね。(Dさん)	A(1), C(1), D(2), E(6)
	30.困難の受容	子育てに伴う大変さや苦痛を受容できる	(肉体的にハードだったけど)若かったし当たり前だとおもつてたから、そんなに苦にならなかつたですね。子どもはいつか確実に大きくなるという展望があつたから、しのげるところはあつたと思いますけどね。(Aさん)	D(5), E(7)
	31.子の成長に抵抗	子の成長に気持ちがついていかず、心配やさみしさを感じる	1人で海外に行つたりして、一人で巣立つてしまつた(感じがある)。生きてるんだろうか、どこにいってんだろうってその時はすごく心配した。もっと旦那さんに注意してほしかつた。言つたらあかんって言つてほしかつた。(Bさん)	B(1), C(3)
子育てへの心残り	32.子に自分への信頼を求める	子を未熟な存在とし、親を頼るように望む	心配なところもあって、大人だなどといふか、私がしたら怖いもの知らず。何とかなるって感じ。子どもの成長についていくつてないのかな。(Bさん)	B(4), C(3), D(4)
	33.子育てに対する不完全感	自分をまだ未熟な親であるとし、子育ても充分でないと語る	ちゃんとした親になれたんだろうかっておもうよ。自信がない。なんかしてあげたとかいうような、やってあげた!っていうようなのがない。満足感が無い。(Cさん)	C(10)

概念25

結 果 図

母親の養育体験の語りから、現在の母親への変化

の過程について、カテゴリー同士がどのように関係しているかを矢印で表した結果図を作成し図1に示した。なお、概念を一つにまとめた上にカテゴリー名を表記している。

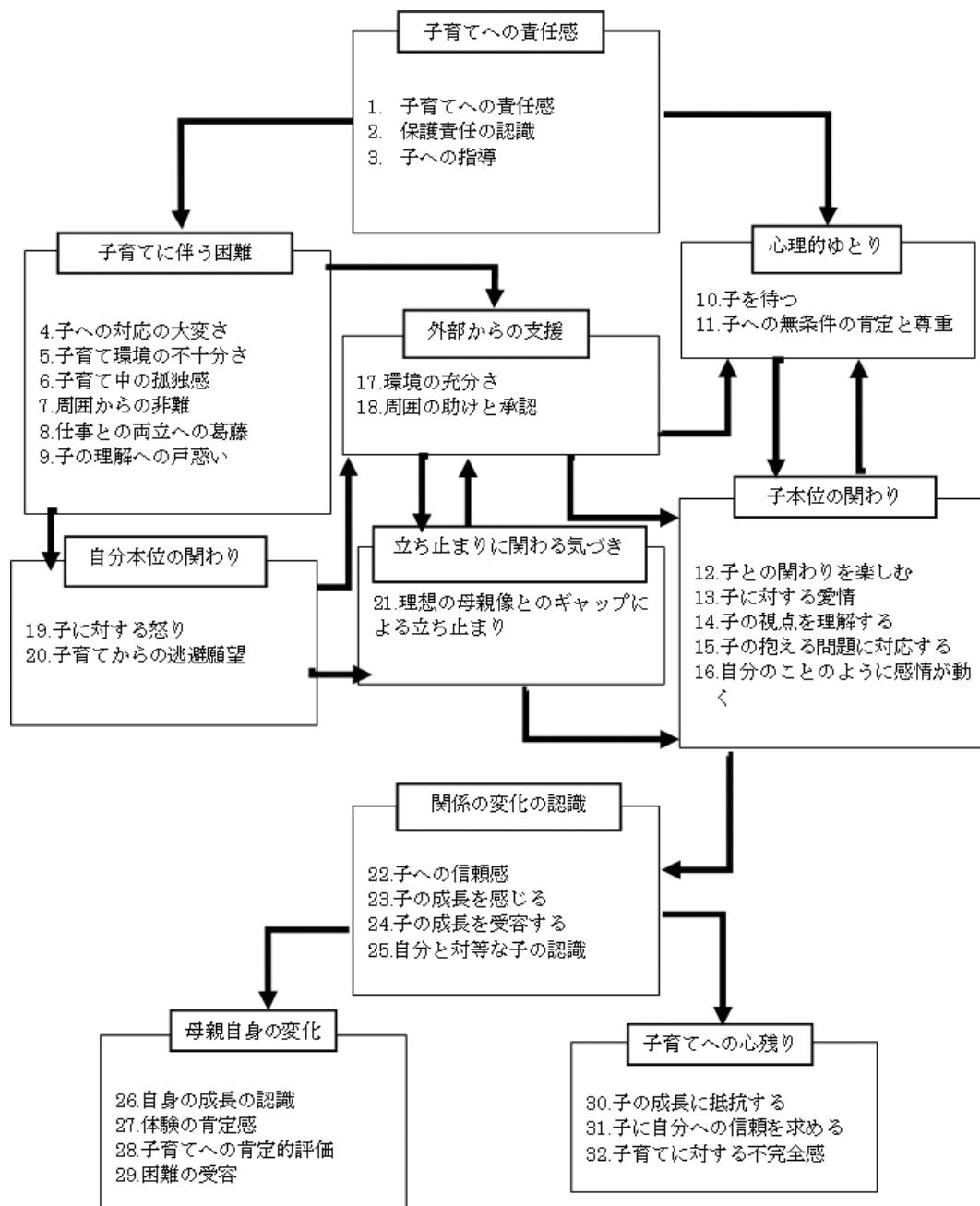


図1 M-GTA結果図

考 察

以上・M-GTAを用いた結果図を提示した。次にM-GTAで抽出されたカテゴリーの分析の結果に基づき、ストーリーラインに沿ってカテゴリーごとに考察を行い、最後に総合考察を行う。なお、面接協力者の発言は「　　」内に示す。

〔子育てへの責任感〕

このカテゴリーは母親が子を有するに際して母親としての責任を果たそうとする段階を指しており、「子育てへの責任感」「保護責任の認識」「子への指導」が含まれている。ストーリーラインの移行では最初に位置している。全体として子の未熟な部分が強調される。

大島（2013）は自身の論文において生成した子育てへの義務感というカテゴリーを、子に良かれと思ひながら子育てを開始するが、時に子育てへの義務感を感じ、気付けば自分本位の関わりをしてしまうという構造を述べ、その背景には母親が子育てをするべきという性役割分業が見られ、母親を苦しめる要因の1つであるという考えを述べている。本研究においても、性役割分業についての語りは見られた。例えばEさんは、「こういうこと（しつけ）は男の人にはせたらだめだと思ってさせなかつた」と語っている。これは後にEさんの中で反省すべきことの1つとして語られており、「母親も強くないといけないけど、父親も参加すべきだなと思った。」と語っている。

本研究において、「子育てへの責任感」に苦しんだという語りは見られなかったが、子の将来に責任を持とうとする、よかれと思う行動が子育てにおける困難を発生させることは考えられる。例えばAさんは、「幼少期をきちんと育てないと家庭内暴力をするとか、非行に走るとかっていうのを、空気を吸うように耳にしていた」ために「子育てに対する恐怖心が常にあった」と語り、「枕にはめて子育てをしていた」と語っている。このように、こうしなければならない、という「枕」から外れないようにするというのは非常に精神的に消耗するのではないだろうか。またEさんは子の不登校について、「みんなと一緒に学校に行くことが当たり前」という考えを持っていたが、「学校に行ったから必ずすごい人になれるというのは関係ない。その子がいつどんな子になれるというのは学校がすべてではないんだって（相談者から）発見して」からは「自分自身も元気になれ

たし（子の存在が）うれしくなった」と語っている。このように、社会的に望まれていないことをしないよう指導しようとすると困難が発生しやすいが、現実や子を多角的に見ることが可能となればこのカテゴリーは子育てに対して母親を苦しめるだけでなく、子への関わりへの積極性を助けるのではないかと考えられる。

またこのカテゴリーは子を持つことで発生し、子との関わりの中で再評価されたり、再認識されると考えられる。

例えば〔省内の機会〕の1つである“理想の母親像とのギャップによる立ち止まり”では、Eさんから子に対する行動として「手を上げた」という語りが見られた。このような出来事を経て自身を振り返り、「我に返る」ことで〔子育てへの責任感〕に立ち返ることができるものと考えられる。また、ここで立ち返ることがかなわなかつた場合に、その行動は拍車がかかってしまうのではないかだろうか。そのような観点からも〔子育てへの責任感〕の認識は重要であると考えられる。

〔子育てに伴う困難〕

子育てに伴う身体的・精神的という2つの面での困難さを表すカテゴリーである。このカテゴリーは、〔子本位の関わり〕を難しくするものと考えられる。「子の対応への肉体的な大変さ」「子育て環境の不十分さ」は、子育てを物理的に難しくし、母親を疲労させてしまい、〔心理的ゆとり〕を無くすことによって〔子本位の関わり〕が阻害されるのではないかと考えられる。またこれらは“子育て中の孤独感”をよりつらいものとするのではないだろうか。物理的に困難が多く、また支援が得られない一方で〔子育てへの責任感〕を感じる状態は母親にとって負担が大きいと考えられる。

また、“仕事との両立の葛藤”は、子育てと就労のどちらも行う現代の女性にとって1つの課題となるだろう。Aさんは、子に「仕事を辞めてくれと言われた」時の体験について、「仕事をすること自体に辞めたいとか、投げ出したいとか思ったことなかつたから、よけいにつらかった」と語っている。“子への理解への戸惑い”にも関連することであるが、子とわかり合えない体験や、子がわからない体験は子育てへの負担を大きくするようである。これは、子は未熟で親が導いていく存在だという認識がある一方で、親とは別の独立した存在である子として尊重し、対等に理解しあつた上で親に従わせなくてはならな

いという関わりの難しさがあるのではないかと考えられる。

これらの〔子育てに伴う困難〕には、やはり個人のストレスをしのぐ力では限界があり、〔外部からの支援〕が有効であると考える。

〔心理的ゆとり〕

〔心理的ゆとり〕は〔外部からの支援〕などの影響を含めて、〔子育てに伴う困難〕からのストレスが和らいだ状態を指す。また、これは〔関係の変化の認識〕がある場合にも、子の変化に対してゆとりをもって対応することができるため、これらは互いに影響しあっていると考えられる。

〔心理的ゆとり〕は〔子本位の関わり〕を助けると考えられる。また、〔子育てに伴う困難〕によって〔心理的ゆとり〕が生まれず、〔子本位の関わり〕が阻害される場合に〔自分本位の関わり〕への移行がEさんの語りから明らかになった。Eさんは〔心理的ゆとり〕において、子の不登校への対応を語る際に、〔外部からの支援〕についてしばしば話題にした。「(子に対して)ほめてくれたのがうれしかった。困ったなというのは言わなかつたから。」と、他者からの承認が得られたことに対して「ちょっとずつ元気になつた」と語った。また、「みんなと同じようにはできなかつたけど、努力はできた」と子のポジティブな面に注目することが可能となっていた。

〔外部からの支援〕の体験を有するかというは個人の体験の差があるが、〔心理的ゆとり〕が〔子本位の関わり〕を志向する助けになり、〔関係の変化の認識〕に影響すると考えられる。

〔子本位の関わり〕

子への働きかけを子を優先して行う段階であり、「子との関わりを楽しむ」「子の視点を理解する」「子に対する愛情」「子の抱える課題に対応する」「自分の事のように感情が動く」が含まれる。

〔子育てへの責任感〕だけで子育てを全うしようとするのは母親の心理的負担が大きい。そのため、「子に対する愛情」などの力を借りて「子との関わりを楽しむ」ことで子育ての中に楽しみを見出すことが可能になる。

〔子本位の関わり〕ができたという実感が子育てへの充実感につながる語りも見られた。Dさんは、幼少期の関わりと現在の子との関係について、「愛情をもって育てた（ので）根本的なところを裏切れないのかなって（思う）」と語っており、現在の子との関

係への満足と、それにつながる道程を整えて来られたことに充実感を語った。

しかし、〔子本位の関わり〕はやはり〔心理的ゆとり〕が重要であると考えられる。〔子本位の関わり〕は〔子育てに伴う困難〕に阻害されやすい。〔子育てに伴う困難〕がある場合には“子との関わりを楽しむ”余裕がなく、“子の理解への戸惑い”がある場合には“自分のことのように感情が動く”ことや“子の視点を理解する”ことがより困難になる。

また、子を優先したいという思いと、自分が尊重されないと感じられる環境へのジレンマが発生すると考えられる。本研究では自分が尊重されない環境を無理に打開しようと〔自分本位の関わり〕を行うと自己嫌悪があつたり、強い反省が見られた。しかし、〔子育てに対する責任感〕の考察でも述べたが、それが見られる場合ばかりではないことも念頭に置くべきである。

また、“自分のことのように感情が動く”ために子の味方でいようと思い、“子の抱える課題に取り組む”ことに努力できたり、そのための心的エネルギーを発生させることができるのでないかとも考えられる。

〔外部からの支援〕

〔子育てに伴う困難〕には身体的な困難と精神的な困難の2つの面が見られた。このためか、面接協力者の語りからは対応して物理的な支援と精神的な救いの語りが見られた。

物理的な援助として語られたのは“環境の十分さ”である。子育てをする、あるいは子育てと仕事との両立を可能とする環境が十分であったために子育てが物理的に楽であったことが語られた。

精神的な支援として、“周囲の助けと承認”が見られた。これは子育てや仕事における頑張りや大変さが認められ、それが心理的負担を軽減した状態である。

これらは相互に影響していると考えられる。Eさんは、“子への対応の肉体的な困難さ”により、子を保育園に預ける判断をしたとき、「(3人への対応が大変で)このままだったら精神的にやられる」と思い保育園に入れようと思ったが、「親が見ずに預けてるっていうイメージが田舎にはあって」とやや抵抗を示したように語られた。この場合、物理的な支援が得られるにも関わらず困難さが解消したとは言えない。これは“周囲の助けと承認”という心理的な面の支援が不足しているからであると考えられる。Eさんからも、「(保育園の先生に、保育園は)親が

リフレッシュして、子どもとのいい関係を作るための手段ですって言われたとき、母親としての荷が下りた。」と語られた。

〔自分本位の関わり〕

〔子育てに伴う困難〕により〔心理的ゆとり〕が希薄になり、子の行動を無理にコントロールしようとしたり、子に対して自分本位な怒りを持つ状態である。

〔子本位の関わり〕でも述べたが、これは子を優先しようとする一方で、自分が尊重されない状況への不満やジレンマから、その状況を無理に打開しようと〔自分本位な関わり〕として、子に怒りをぶつけてみたり、そのような状況から逃げたいと思うのではないだろうか。

中谷・中谷（2013）は母親の自尊心の低さや育児ストレスの高さから生じた被害的な認知特性が子どもへの虐待的行為に影響を及ぼし、また虐待的行為は子どもに対する否定的認知の影響ではないことを報告した。

「子育てへの逃避願望」について、Eさんは「どうしたらいいのかなって、（誰にも話を聞いてもらえない）そういう時間がなかったのがしんどかった。死にたいとは思わなかったけど、もっと楽になれたらって」と語った。また、Eさんは「でもバーッと子どもの顔が浮かんで、おいていけないと思った」と子への責任感も口にした。このように、本研究からも子への否定的な語りは見られなかった。このことから、逃げ出したい気持ちと逃げてはならないという気持ちの2つが母親を葛藤させるのではないかと考えられる。また、〔自分本位の関わり〕はその後強い反省につながり、〔子育てへの責任感〕に立ち返ることが可能であると考えられる。

〔内省の機会〕

〔自分本位の関わり〕という、余裕のない状態についての内省を行うきっかけや、その出来事についての語りが見られた部分である。このカテゴリーでは、「理想の母親像とのギャップによる立ち止まり」が特に語られた。

〔内省の機会〕が起こる際には母親は何らかの理由で全く1人で行う育児・養育に限界を感じ、〔外部からの支援〕の必要性に気付くと考えられる。Eさんは、「毎日、夫は（家庭外の）活動に忙しくて、（夫は）私が（子の）面倒を見るのは当然だと思っていた。元気いっぱいに（保育園から）帰ってくる

子どもに心の準備がいつも（十分には）できていなくて」と語った。また、この状態を初めて限界だと認識したのは「子どもを思いっきり怒って、たたいてしまったとき」と語っている。「（子が）‘ごめんなさい、なんでもいうこと聞きます’って子どもが泣いてるのを見て、私が言わせたんだと思った。それがとてもつらかった。私はそんなことしないって思ってたけど、こうなりえるんだって思ったらぞっとして…。そういうことがあって、ちょっと息抜きしながらじゃないとやってられないって思うようになって、お迎えに行く10分前は本屋さんに行くとか、自分の時間を少しでも持てるようにならうって思えた。実家のほうにも相談したり、そういう時間を持てるようになってから子どもといい関係が作れるようにならうかもしれない」という語りも見られた。

〔内省の機会〕が起こり、母親は自分の限界を改めて自覚し、子とのよりよい関わりや自分にとっての生きやすさのために、環境に対してのアプローチを変えたり、身の回りにある資源を再発見すると考えられる。また、この段階では〔外部からの支援〕を与える援助者や子との関わりにおいて新鮮な体験が得られるため、のちの〔母親自身の成長〕を振り返る際、このカテゴリーに強い思い入れを示し、〔子育てへの心残り〕の語りの強い母親にみられる“子育てに対する不完全感”を体験しにくいのではないかと考えられる。これは、自分の限界が見えるまで頑張った自分を体験し知っていることや、子育てに伴う変化を意識的に体験したために、子育てへの手ごたえを持っているためと考えられる。

一方で、“理想の母親像とのギャップ”という、他者に話しづらい内容であることも事実であるため、〔外部からの支援〕に直接的につながらない可能性も考えられるため、留意が必要である。

このカテゴリーについて、実際の面接では十分なデータの数が得られていない。しかし、母親の成長に大きな影響を与え、少ないながらも重要なカテゴリーであると考えられる。得られたデータが少ない要因として、自分の失敗体験とも言える内容であったため、面接者が積極的に聞かないと出ない内容であつたんだろうと考えられる。今後の課題としてこの部分に積極的に焦点を当てた研究として面接協力者の同意を得て改めてデータを収集する必要があるだろう。

〔関係の変化の認識〕

子の変化に応じて母親が子との関係を見直す段階

である。今の子に必要な母親に変化していくため〔子本位の関わり〕という側面も見ることができる。“自分と対等な子の認識”にも見られるように、子の自立を認めて対等な関係になっていくことが可能になる段階である。この段階には母親によって個人差が見られた。例えばAさんは「高校では完璧に信頼していた」と語っているが、Bさんは大学生の子に対して「(まだ)すごく心配」と語っている。

〔関係の変化の認識〕の有無は〔母親自身の変化〕と〔子育てへの心残り〕への移行に関連すると考えられる。〔関係の変化の認識〕は〔子育ての責任感〕からくる〔子本位の関わり〕を調整する段階であるので、“子の成長を感じる”“自分と対等な子の認識”がない状態であると、子が未熟な存在から変わらないため、子の成長と母親の認識に差が生まれてしまうのではないかと考えられる。よって母親は子の親離れをさみしく感じるのではないかと考えられる。

この段階は子の成長に合わせて母親が変化するだけでなく、次の段階である〔母親自身の変化〕の発見にもつながると考えられる。

〔母親自身の変化〕

子との関わりと自身の成長を通して自身の変化を感じる段階である。

〔関係の変化の認識〕と〔母親自身の変化〕の関係であるが、子の変化に対応して母親も変化していることの認識が〔母親自身の変化〕につながるのでないかと考える。Bさんは子の変化を早いと感じており、それについて「子どもの成長についていけないんだろうか」と語っている。この語りから考えられるのは、子とともに母親が変わることを母親らは変化や成長ととらえているということである。

この段階で〔母親自身の変化〕を感じている母親であっても、〔子育てへの心残り〕を口にする人もいた。つまり、〔母親自身の変化〕と〔子育てへの心残り〕は母親にとって両価的に存在しうるものであると考えられる。例えばDさんは、「自分を勉強させてくれるのは子どもはすごい」と、子どもに対しても前向きな語りがあり、「子どもは絶対持つべきだと思う」と“子育てへの肯定的評価”も見られた。Dさんは〔関係の変化の認識〕もしっかり語られている。

一方でDさんから「親は見てあげたいっていう気持ちはある」「頼れる親でありたい」など、子との関係が全く対等になるわけではないことが語られた。

これらから、子を対等に、大人として認識するこ

とは母親の子離れをサポートし、一方で〔子育てへの心残り〕は親子関係を希薄にしないという点でつながりを保持するのに有効なのではないだろうか。

〔子育てへの心残り〕

子の成長を受け止められなかつたり、母親としてまだまだ未成熟である感じを抱く段階である。〔母親自身の変化〕でも述べたが、〔母親自身の変化〕と〔子育てへの心残り〕は両価的に母親に存在しうるものであると考えられる。

依田（1988）は、日本の母子をめぐる文化について、日本の家族は夫婦中心ではなく、親子中心で運営されており、特に母子の間には強い母子一体感があると述べている。この強い母子一体感を母親が青年期になっても持ち続ける場合、親離れ・子離れが遅れるとしている。依田（1988）は、これに対して子を生きがいにしないことの重要性を述べている。このために、夫との関係を見直したり、興味をもって打ち込めるものを、それぞれ持つことが大切であると述べている。

“子の成長に抵抗する”は、自分は未成熟な親であるという認識が、子の成長の認識を阻んでいるとも考えられる。岡本（1997）は、特に専業主婦に多く見られるが、母親のなかには家庭外活動を得てアイデンティティを再構築することが難しい属性の者もいるとしている。

また、Cさんは「親になってんだろうか、って思うよ。なんかしてあげたというような、やってあげた、っていうのがない。満足感がない」と語った。このように、〔子本位の関わり〕をやりきった実感がない場合にも〔子育てへの心残り〕は語られるようである。

しかし、Cさんからは現在の子との良好な関係が語られた。〔母親自身の変化〕でも述べたが、〔子育てへの心残り〕は子との関係を保持し、子が大人にあるいは一人前になった後であっても自分の子として心配したり、世話をしたいと思う気持ちにつながるのではないだろうか。

総合考察

本研究は養育体験が母親の生き方にどのように影響を及ぼす過程とその変化の構造を明らかにし、加えて養育に伴う母親の混乱やありようの変化について考え、子育て支援の充実につながる考察を行うことを目的とした。

第1に、育児体験がその後の母親の生き方にどのように影響を与えるかという点についてである。山口（2010）は86名の母親を対象に母親の発達観についての調査を行った。この結果、自分は一人前の母親であるという意識をもつ母親は全体の14%であり、一人前であると判断する理由には〈自分よりも子を優先するようになったから〉と〈育児に自信が持てるから〉の2つが挙げられた。一方で、非一人前と自己評価した母親らには〈感情的に子どもと接する時があるから〉〈理想の母親像と違うから〉など、多彩な回答が見られ、自らを母親として未熟であると考えており、育児に対して自信が持てないという点での共通点を報告している。

本研究では、子の成長とともに自身の成長を感じられる場合に自分自身への変化を感じることができるのでないかと考えられた。また、自分自身の変化を成長という面でとらえた場合に、自らの育児に自信がない場合、自分自身の変化を語りにくいということが、変化を感じないという語りの背景にあるのではないだろうか。

一方で、子育てに心残りが見られる場合であっても、子への関わりに親としての責任を感じることで親子関係が保持されるのではないかと考えられた。山口（2010）は、親としての責任感を果たすことが母親であるための大きな意味をもっており、その責任感があるために母親は、生涯にわたって発達し続けるものだという漸進的発達観を有するものと考えた。子育てへの心残りは、こうした責任感を手放していないという母親の語りの表れという見方も可能であると考えられる。

第2に、子育てに伴う幸福感と困難についてである。子育てに伴う幸福感は、愛情や成長を子を発生源としたもののほかに、〔外部からの支援〕によって得られた出会いや経験を喜びと感じたり、達成感と結びつけることで得られると考えられる。また、〔外部からの支援〕が必要な困難についてである。

〔子育てに伴う困難〕については物理的な大変さと精神的な困難さの両面が認められた。この困難さは子育てを行う際には母親を緊張させ、望ましくない行動のきっかけになりえるだろう。しかし、確かにネガティブな側面である一方で〔内省の機会〕などを得られることによって、後の〔母親自身の成長〕、〔関係の変化の認識〕の語りにこのときの困難が伴っている。これは、母親として何か頑張った手ごたえが〔母親自身の成長〕を裏付ける体験となっており、また子の変化に気づく視点を得られるためで

はないだろうか。

第3に、子育て支援についてである。上述の子育てに伴う困難の2面から、物理的な大変さと精神的な困難の2つを解決することが支援の前提であると考えられる。

岸田・久保・倉持（2013）は、今日の日本の子育て支援について、少子化が進む中で乳幼児の子をもつ親への支援は様々なアプローチが行われているが、思春期の子どもを持つ家族への支援は圧倒的に少ないと問題を提起している。加えて、大久保ら（2012）の調査によれば、思春期の子どもをもつ親のうち子育てに関する相談をしたいと思う者は6割以上いた。

また中釜（2007）は、心理教育に注目した。その理由として、①さらに開発が求められている領域であること、②教育との接点が多い、③成長や自尊心の向上を狙う働きかけである、④予防に役立つ、⑤グループ活動を利用することで人間関係やネットワークづくりに貢献する、⑥一人の支援者が一度に複数の人に働きかけられるという点で経済論理にかなった方法である、などが挙げられた。また我が国の心理教育の開発が遅れていることも指摘した。こうした、専門家を交えて子どもや母親の個別の状況に対応したり、知識を得る場の整備が必要ではないだろうか。心理教育が行われ、正しい知識が浸透することは、子育てをする母親の環境を整備することにもつながると考えられる。

現在では、主にその役割を児童相談所などが担っているが、スクールカウンセラーの常駐化や、子だけでなく親の相談窓口としての専門家が教育の現場において、教員との連携が取りやすい状態になることが望ましいと考えられる。

そのため、“子の抱える課題に取り組む”母親を支持することとともに、母親が子を受容し“子を待つ”ことができるような〔心理的ゆとり〕を支えることが重要であると考えられる。

今後の課題

本研究では調査の対象者を20代から30代の子を有する母親としたため、子の年齢の差に開きが生じる場合がある。また、孫を有する母親も見られ、これも、自身の成長を語れる母親と語れない母親という差が生じた要因となった可能性も考えられる。今後は子の年齢の範囲を狭めたり、調査対象者の属性に配慮して調査することが課題といえる。

また、本研究は仮説生成段階の研究であるため、今後それぞれのカテゴリー間の関係などは量的なデータを用いて仮説を検証していく必要があるだろう。

謝　　辞

本研究は2016年度に追手門学院大学心理学部に提出した卒業論文のデータを、一部加筆修正したものである。

本研究の調査及び執筆にあたり、本論文作成にあたり、終始丁寧なご指導をいたいた追手門学院大学心理学部中鹿 彰教授に深謝いたします。

また、本研究の趣旨をご理解いただき、快く協力していただいた5名の面接協力者の方々にも、厚く御礼申し上げます。

本研究を書き上げるにあたり、率直なご意見と励ましを賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

6. 引用文献

Erik. H. Erikson, (1980). *Identity and the Life Cycle.* Norton.

(エリク・H・エリクソン 西平 直・中島由恵(訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)

金城志麻 (2015). 母親の子供の感情認知が育児自己効力感へ及ぼす影響：母親の“ego-resilience”との関連から 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要, 6.

木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂

木下康仁 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析方法 富山大学看護学会誌 6, 2

岸田泰子・久保恭子・倉持清美 (2013) 思春期の子どもを持つ母親の健康と子どもの養育に関する予備研究 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 64 (2): 221-226.

厚生労働省 両立支援の広場 <http://www.ryouritsu.jp/>
国土交通省白書 (2013).

<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h24/hakusho/h25/html/n1213000.html>

牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, 3, 43-56.

中釜洋子 (2007). 子育て支援の心理教育 日本家族心理学会 (編) 家族支援の心理教育—その考え方と方法— 金子書房 pp34-45.

中谷奈津子・中谷素之 (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究 17, 2, 148-158.

大日向雅美 (1991). 親としての発達 児童心理学の進歩30巻, 金子書房 153-17

岡本裕子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味—

大久保千恵・市来百合子・堂上禎子ほか (2012). 思春期の親が必要とする支援の探索的研究, 教育実践家発研究センター研究紀要, 21, pp189-192.

大島聖美 (2013). 中年期母親の子育て体験による成長の構造：成功と失敗の主観的語りから 発達心理学研究 24, 1 22-32.

鎧 幹八郎 (1990). アイデンティティの心理学 講談社現代新書1020

上田礼子・平松真由美 (2001). 中年期の親の子育て評価と成人初期の子どもの健康状態：リスクケースの早期支援の視点から 沖縄県立看護大学紀要, 2, 45-50

氏家達夫・高濱裕子 (1994). 3人の母親—その適応過程についての追跡研究— 発達心理学研究, 5, 123-135.

山口雅史 (2010). 母親になるということ —アイデンティティを巡る考察— あいり出版

依田 明 (1988). 親になることと、子育て 国谷誠朗(編) 講座家族心理学 3 金子書房 pp24-67.